第 4 回学会大会 報告

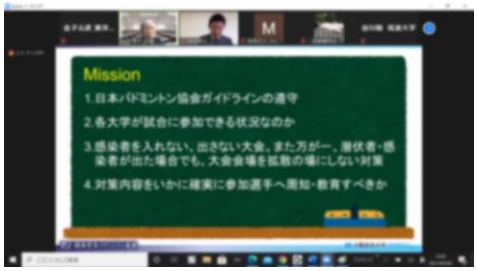
「地域におけるバドミントンと科学をつなぐ」をテーマに、2021 年 3 月 6 日にオンライン開催しました。当日の様子につきまして報告いたします。

1. シンポジウム

「各地域における covid19 下でのバドミントン再開の事例」（コーディネーター：吹田先生）と題し、萩原正大先生（日本スポーツ振興センターハイパフォーマンス戦略部開発課：以下、HPSC）、有吉晃平先生（大阪体育大学体育学部）、佐々木理恵先生（札幌市立札幌藻岩高校教諭）の御三方にシンポジストとしてご登壇いただきました。

萩原先生からは、covid19 下における HPSC のエリート競技者発掘や育成に関わる実践事例をご紹介いただきました。子どもたちを対象としたオンライン教材を活用した取り組みについては、その有効性や新しい方法としての可能性を見い出しながらも、対面活動に伴うちょっとした雑談の重要性についても言及されていました。「信頼関係の構築」に関わる示唆が内在していたと理解できます。また、HPSC はその組織や活動の特性から各競技団体や各地域強化拠点との連携も多いとのことで、萩原先生のそれらの経験から、当該事業に対して「関係者の全体を把握し、それを整理すること」、その上で、「誰が何をするのか」を明確にすることの重要性が述べられました。この指摘は、当学会の今後の取り組みに対しても大切な示唆が含まれていると考えられます。質疑の中では、HPSC と当学会との協働の可能性についても意見交換がなされました。今後の展開に期待したいです。

有吉先生からは、covid19 下における関西学生バドミントン連盟の大会開催に向けた取り組みをご紹介いただきました。関西学生バドミントン連盟では、大会開催に伴う Mission として「日本バドミントン協会ガイドラインの遵守」「各大学が試合に参加できる状況であるか」「感染者を入れない、出さない大会とすること。万が一、潜伏者・感染者が出た場合でも、大会会場を拡散の場にしない対策を講じること」「対策内容をいかに確実に参加選手へ周知・教育すべきか」を掲げ、さまざまな取り組みを行ったそうです。その過程においては、大会参加選手全員に対してオンライン講習会を実施し周知および教育を徹底したこと、秋季リーグ戦では指導者の帯同が不完全となりがちな下部リーグの感染対策が難しいとの判断から、その開催を断念したこと等の実例も紹介されました。有吉先生のご発表の中には、会員皆さまの covid19 下での活動を適切に活発化していく一助となる新たな視点も含まれていたのではないでしょうか。活動の一層の充実と活性化に期待したいと思います。



佐々木先生からは、北海道、および札幌地区における covid19 下における大会実施の実態について

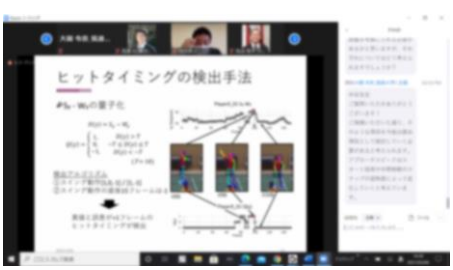
ご紹介いただきました。北海道は道内でも地域による感染状況に大きな違いがあり、上位カテゴリーの大会に向けた予選大会が実施できた地域とそうでなかった地域があったそうです。このことに伴い、予選大会が実施できなかった地域では、上位カテゴリーの大会に出場する選手の決定に苦慮されたことが報告されました。また covid19 の感染が拡大したり沈静化したりと流動する社会情勢ゆえ、感染が急拡大した際には、時に大会開催の可否を決定するプロセスが不明瞭となったり、時に中止が決定していた大会が再開したケースもあったそうで、その混乱や現場のご苦労が伝わってきました。また大会が開催（再開）されると選手は喜ぶ一方で、開催の意義が不明瞭になってしまいがちで、大会を開催する意義を covid19 以前にも増して熟考する必要があるのではないかとの問題提起もありました。佐々木先生による「大会の意義を熟考すべき」という指摘は、covid19 下において「できることから再開する」「活動を止めない」というフェーズから次のフェーズに移りつつあることの表れと読むこともできるように思います。

シンポジスト御三方からは、HPSC という中央での取り組み、関西学生バドミントン連盟という一地区での取り組み、北海道および札幌という地域での取り組みをご発表いただきました。いずれも大変示唆に富んだもので、かつ、中にはすぐにでも実践に取り入れられるもの、研究課題として構想できそうな視点も含まれていたように思います。いましばらく covid19 下という社会情勢が続くであろうこと、VUCA と称されるような社会情勢であることなどを考え合わせると、今後も未知の状況におけるバドミントン活動の方法を模索する場面が出てくるのだと思います。そうしたとき、各フェーズにおける実践事例をいかに素早く集積し、それを形式知として公表還元できるか、さらには各フェーズにおける実践に対してどのような科学的根拠に基づく提案・提言ができるのか。現 covid19 下における問題に留まらない当学会の使命の一端にも通ずる問題だろうと考えられます。

2. 口頭発表

3 つのセッションに分け、計 13 演題の発表がありました。発表者の中には大学院生はもちろん、学部生もおられ、当学会として大変嬉しく感じております。一方、今回の学会大会では発表者、および共同研究者のほとんどが大学関係者でした。いわゆる現場において、日々たくさんの試行錯誤を重ねておられる皆さまにもご発表いただくことのできる空間となるよう、そして、その膨大な蓄積を共有できる空間となるよう、当学会として努力を重ねていく必要があると痛感したところです。

演題の詳細につきましてはプログラム（http://jsbadr.jp/conference.html）をご覧いただけたらと存じますが、情報に関わるもの、トラベル技術に関わるもの、ヒッティング技術に関わるもの、ゲーム分析に関わるもの、教育に関わるもの等、多岐に亘りました。バドミントンに関わる研究において、従来では目にすることのなかったような手法や視点からアプローチしていたものもあったように思います。今後の発展に期待しますとともに、その成果を次回以降の当学会学会大会においてご報告いただけることを心待ちにしております。質疑についてはチャットを活用して展開しましたが、絶え間なく書き



込みが続いていた状況で、対面で実施する口頭発表とはまた異なる活気が生まれていたように思います。

一方で、ご発表いただいたテーマや内容を、仮に自然科学と人文社会科学に大別することをお許しいただけるのであれば、その大半が前者であったといってよいでしょう。このこと自体を否定する趣旨ではありませんが、バドミントンという複雑な対象を論じ語ろうとするとき、後者に該当する発表が著しく少ないことは、そこに「界」としての課題のひとつがあるのではなかろうかと考えさせられます。また、第 1 回学会大会のシンポジウムの中で升佑二郎先生（健康科学大学）が、自然科学的なアプローチを通じてバドミントンの課題を解明していくことの重要性と発展可能性を示された際、「平均値に収まらない個性ある選手・個性の現れた事象」について言及されていたことをも考え併せたとき、当学会として、個別具体な事例的な研究をどう受け入れ、どう取り扱うのか。一方で、バドミントンを、「学」として体系づけていこうとすれば、そこには人文社会科学的な研究、ならびに思考を欠くことはできないのだと思います。

3. 学会大会報告 後記

まず、前回の第 3 回学会大会の扱いを決定するのが遅れに遅れ、関係者の皆さまに多大なご迷惑をおかけしましたことを心よりお詫び申し上げます。申し訳ありませんでした。

今回の第 4 回学会大会についてですが、オンライン開催ということで、いくつもの不手際があっただろうと思います。皆さまが寛容、かつ迅速にご対応いただいたことで、大過なく終えることができたのだと思います。「これまで以上に活発な学会大会だったのではないか」「大成功だったのではないか」というお声もいただいており、少しホッとしております。皆さま、本当にありがとうございました。

次に、閉会式の際に渡辺雅弘先生が書き込んでくださったものを、改めてご紹介させてください。日本バドミントン学会が取り組むべき課題のひとつが、端的に記されていると思います。当学会理事会を中心に、学会としての取り組みを具体化していきたいです。しかし、学会として具体的に動き出すまでに時間が経過していってしまいます。学会員の皆さまの中には、指導現場をお持ちの方も多数おられることと思います。ぜひ、今すぐにでもできる体力テストなどを行い、それを記録として残してみてください。

コロナの影響で様々なバドミントン活動がうまく行えなくなりました。これから回復に向

かうのでしょうが、長期にバドミントンができなくなった状態のときにどのような変化が個々のプレーヤーに起こっているのか、そして再スタートするときにどのようなことを行えばいいのか、それがどのように継続していくのか、現実の姿をエビデンスで示すことが難しかったのではないでしょうか。これを機会に、バドミントン学会として、バドミントンプレーヤー（できるだけ多くの）の体力についての縦断的・横断的調査を定期的、継続的に行なってはいかがでしょうか。サッカーではトレセンに通う子供達の体力テストを定期的に行なっていたので、再開したときに体力テストを行い、何が低下しているなどの情報をいち早く把握して、全国にフィードバックしたようです。このようなことは、バドミントン学会しかできないような気がします。（渡辺雅弘先生・20210306）

最後に。学会大会に前後した学会役員の会議等の中で、設立から今までの第一期（3 年）を振り返り、反省しながら、もっと「夢を語れる場にしよう」「夢に向かえる場にしよう」という声が盛んに飛び交いました。夢を語り、夢に向かえる企画を少しずつ増やしていきます。お近くにいるバドミントン関係者や愛好家の皆さまをお誘いあわせの上、積極的にご参加いただけましたら幸甚です。皆さまのご参加をお待ちしております。

第 4 回学会大会、本当にありがとうございました。

文責：金子元彦（第 4 回学会大会実行委員・東洋大学）